

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：37125

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26463365

研究課題名(和文) 半側空間無視の代償行為の獲得を促す主意的役割を用いた看護介入の効果

研究課題名(英文) Effective Acquisition of Compensatory Behavior in Patients with Unilateral Spatial Neglect: The Voluntaristic Role

研究代表者

日高 艶子 (Hidaka, Tsuyako)

聖マリア学院大学・看護学部・教授

研究者番号：50199006

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、高次脳機能障害者のセルフケアの再構築を促す看護介入モデルの試案の中で、半側空間無視に対する主意的役割の活用効果を検証し、看護介入モデル構築の一助とすることにある。

研究成果から、主意的役割を活用した看護介入は、従来の聴覚的・視覚的・触覚的手がかりの枠を超え、代償行為の獲得を促すことが示唆された。主意的役割のアセスメントは、ロイ適応看護モデルが示す役割機能様式のアセスメントから明らかにされ、特に二次的役割から抽出された。患者が人生の中で特別な価値を有し情熱を持って遂行してきた役割は、無視側への探索行動を促す介入として効果が期待され看護介入モデル構築の一助となることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to examine a tentative nursing intervention model, which promotes self-care reconstruction of higher brain dysfunction patients. Especially, we try to examine the effect of nursing intervention using the voluntaristic role to encourage acquisition of compensatory behavior in patients with unilateral spatial neglect (hereafter USN). The voluntaristic role is revealed through assessment of the role function mode of the Roy Adaptation Model. It is often positioned as a secondary role that patients have performed with a sense of purpose and passion stronger than at any other point in life.

Throughout the research, results suggested that using the voluntaristic role that patients performed with the highest sense of purpose and passion in their life will motivate patients to compensate for their neglected side. Using this method may be a helpful tool to construct nursing interventions that encourage exploratory behavior in USN patients.

研究分野：リハビリテーション看護学

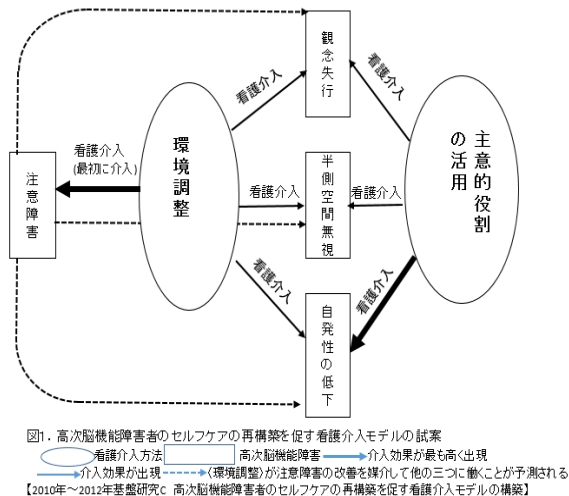
キーワード：半側空間無視 主意的役割 看護介入 リハビリテーション看護 代償行為

1. 研究開始当初の背景

わが国のリハビリテーション看護領域において高次脳機能障害とセルフケアに関する関心が高まったのは2000年以降であり高次脳機能障害に対する看護介入はまだまだ確立されていない現状にある。

事実、2003年から2012年までの過去10年間に日本リハビリテーション看護学会で報告された演題の内容をしてみると全演題件数690件中、高次脳機能障害に関する演題件数は69件とわずか10%であった。

研究代表者(日高)は、平成22年度(2010年度)から平成24年度(2012年度)まで科学研究費助成事業を受け図1に示す高次脳機能障害者のセルフケアの再構築を促す看護介入モデルの試案の検証に取り組んだ(図1)。

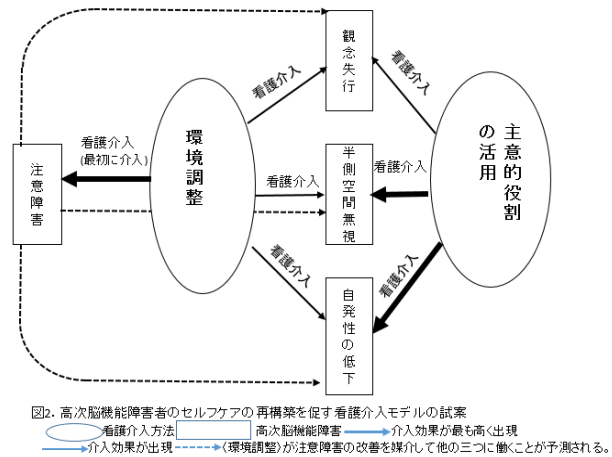


本モデルは、注意障害、観念失行、半側空間無視、自発性の低下への看護介入の順序性について示したものである。まず、介入の順序性としては、モデルで最も基礎的部分に位置づけている、認知の基盤である注意障害に対して介入することで他の高次脳機能障害への介入や準備が整うことを呈示した。つまり、環境調整が注意障害の改善を媒介して観念失行や半側空間無視、自発性の低下に働くことが予測された。

介入方法の環境調整と主意的役割の活用は、四つの高次脳機能障害に何らかの効果をもたらすが同等に効果が得られるわけではない。環境調整の場合は、太線で示しているように、視覚、聴覚刺激を制限する必要がある注意障害に対して、高い効果が期待された。主意的役割の活用は、自発性の低下の介入として最も効果が期待された。

ところが研究過程において、主意的役割の活用は、自発性の低下事例のみならず半側空間無視を呈した患者の無視側への代償行為

の獲得を促すことが示唆された。そこで、本研究においては、図2に示すように、主意的役割の活用を自発性の低下と同様に半側空間無視に対しても高い効果を認める介入方法として位置づけ、太い線で表した(図2)。



ここでいう主意的役割とは、主観的な観点から位置づけられた主観的意味付与がなされた役割をいう。主観的意味とは、マックス・ヴェーバー(清水沢、1983)のいう「一人の行為者が実際に主観的に考えている意味であり...客観的に正しい意味とか形而上学的に解明された真なる意味とかいうことではない」あくまでもその人の主観的観点から人間の行為をとらえる場合、その行為者にとって特別な意味を持つ役割、その人の主観的な観点において特別な価値を有するとみなされている役割、これを主意的役割または、主観的役割と定義する。

一方、半側空間無視は、大脳半球病巣と半体側の空間に呈示された刺激に気づかず、注意を向けたり、反応したりすることが障害される病態である。右半球損傷後の左の半側空間無視は、一ヶ月以上続くと障害として残りやすく、症状が完全に消失することはまれである。従って、半側空間無視もセルフケアを低下させる大きな要因となる。半側空間無視の治療における最も一般的な方法は、空間の探索における無視の影響を軽減するための代償方略であり、患者が無視を代償する能力を獲得することができるように介入することが臨床的課題である。

無視を回避するための代償方略には、左側を見るようにするための言語的、視覚的、聴覚的な手がかりや環境の調整がある。しかし、代償を目的とした聴覚的、視覚的、触覚的な手がかりは、ある状況では役に立つかもしれないが、自立に結びつくことはほとんどない(Penelope S 著、宮森監訳、2007)。つまり、患者に「左側を見て下さい」と言語的手がかりや、左側に赤い色のテープを用いて印をつけて視覚的に手がかりを与えたとしても患

者が自らの意思で左側に注意を向けない限り、日常生活には般化されずセルフケア行為の遂行は期待できないと言うことである。患者が自らの意思で無視側に注意を向ける方法を検討すると、行為を動機付ける刺激の呈示が必須と言える。

ここに主意的役割の活用効果が期待される。平成 22 年度(2010 年度)から平成 24 年度(2012 年度)に研究代表者(日高)が実施した研究において、半側空間無視を呈した患者の代償行為の獲得に主婦としての役割や趣味を用いた介入が効果的であったのは、それが患者にとって主意的役割であったからだといえる。

2. 研究の目的

本研究においては、半側空間無視を呈した患者の無視側への代償行為を獲得するための介入方法として主意的役割を用いた介入の効果を検証し、高次脳機能障害者のセルフケアの再構築を促す看護介入モデルの構築の一助とすることを目的とする。

3. 研究方法

1) 研究対象

半側空間無視は脳の左半球損傷患者にも起こるが、右半球の損傷による場合が発症しやすく、重篤で長期にわたり残存しやすい。また、左半球の損傷は失語や失行を伴うことも多く評価に困難を来すことが予測されるため本研究においては、対象者を右半球損傷により左の半側空間無視を認めた患者とした。半側空間無視の程度は、線分二等分課題において右側への偏位量が 2cm 以上で抹消課題に見落としを認めるものとした。または、右側の偏位量が 2cm 以下の患者においても探索課題に見落としを認め、研究協力者の看護師と作業療法士が日常生活動作の中で探索行動が不可能であると判断した患者 4 名とした。

2) 介入方法

まず、対象患者の主意的役割のアセスメントにおいては、ロイ適応看護モデルが示す役割機能様式のアセスメントを行い、患者が人生の中で最も使命感や情熱を持って遂行していた役割を明らかにし、2 名の研究者(日高と小浜)で主意的役割を活用した看護介入方略を検討した。

介入は研究代表者(日高)が主体となり実施した。介入期間は、一人の患者に対し約 1 ヶ月間とした。介入期間を一ヶ月とした根拠は、これまでの研究代表者(日高)が携わった半側空間無視患者の代償能力獲得に向けた報告事例を元にした。介入場所や時間は、個々の患者の役割の内容や一日のスケジュールに応じて決定した。

3) 評価方法

評価は、患者が自分の意思で無視側への代償を行ったか、獲得した代償行為はセルフケア行為を促したかについて、作成した評価基準に沿って研究代表者が主体となり、研究分担者(小浜)と病院の研究協力者の協力を得て行った。介入前後のデータ分析は、研究代表者(日高)と研究分担者(西口)で行った。

4) 分析方法

分析は、1 事例ごとにシングルケース研究法の手法を元に介入効果を分析した。また、行動の参与観察から得られたデータはタイムサンプリングの手法を元に行動の生起数を明らかにした。

4. 研究成果

1) 主意的役割を用いた看護介入の効果

まず、主意的役割のアセスメントは、ロイ適応看護モデルが示す役割機能様式のアセスメントにより明らかにされ、特に二次的役割から抽出された。

本研究対象となった 4 事例の二次的役割は、家業である農業、長年地域のために勤めてきた警官、生きがいとしてきた将棋の棋士、主婦といった役割であった。これらの役割について患者が誇りを抱いており、看護師にその役割を生きがいと感じると語っていたことから、主意的役割と判断し看護介入に活用した。

事例 1 の主意的役割は農業と判断され、介入として病院内で植物を育て毎日観察し絵日記をつけることによって無視側への探索行動が促進された。

事例 2 の主意的役割は警察官と判断され、警察にまつわる左右対称に末梢できるイラスト末梢課題を考案し、繰り返し実施したことで無視側への探索行動が促進された。

事例 3 の主意的役割は将棋の棋士と判断され、看護師と将棋を実践することを試みた。看護師が患者の無視側に攻める戦略をとり、患者が無視側を探索する状況を作ることによって無視側への探索行動が促進された。

事例 4 の主意的役割は家族のために家事を行なうことを誇りにしていた主婦役割と判断された。食後に食器洗いを行なうために、トレイをもって廊下を移動する過程で、トレイに配置された食器を無視側に注意を向け落とすことなく無事に洗い場まで運ぶことを促した結果、無視側への探索行動が促進された。

4 事例とともに、それぞれの主意的役割を用いた課題遂行の過程において、従来の聴覚的・視覚的・触覚的手がかりの枠を超え、自らの意思で無視側への探索行動を遂行していたといえる。

また、主意的役割を活用した介入によって高められた無視側への探索行動は日常生活場面にも般化され、特に食事や移動時に無視側への認識が高まる行動を認めた。

以上の結果から、半側空間無視患者に対して、患者が人生の中で最も使命感や情熱を持って遂行してきた主意的役割を用いた看護介入を実践することは、無視側への探索行動を動機付ける刺激の呈示となり、代償行為を早期に獲得できる可能性を示唆し、看護介入構築の一助となることが期待された。

2) 今後の展望

本研究においては、研究期間と対象選定期間、介入方法の選択、介入期間等の関係により得られたデータを統計学的に検定することが困難であった。しかしながら、自発性の低下のみならず半側空間無視患者にも主意的役割の活用が有効であるという新たな知見を得た。

今後は、対象者数を増やし、量的な分析を実施し高次脳機能障害者のセルフケアの再構築を促す看護介入モデルの検証に継続して着手する。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

日高艶子 高次脳機能障害者のセルフケアの再構築を促す看護介入モデルの構築 聖マリア学院大学紀要、査読有、5 巻、2014、7 - 14

〔学会発表〕(計 5 件)

Kohei Obama, Tsuyako Hidaka, Satsuki Obama, Ryouosuke Maeda, Koichiro Tobinaga, Miki Hashimoto, Makoto Ide Effectiveness of Japanese Chess (Shogi) for a stroke patient with Unilateral Spatial Neglect. Asia Pacific Stroke Conference 2014、2014 年 9 月 12 日、Taipei City, Taiwan

Tsuyako Hidaka, Satsuki Obama, Hiromi Nishiguchi A study about the construction of a nursing intervention model with promotes self-care reconstruction of higher brain dysfunction patients. Asia Pacific Stroke conference 2016、2016 年 7 月 16 日、Brisbane, Australia

松尾彩香、戸嶋早織、日高艶子、小浜さつき、吉村綾子 半側空間無視により歩行障害を呈した患者に対する看護介入の一考察 入院前の役割を活用した介入の試み 第 28 回日本リハビリテーション看護学会学術大会 IN 沖縄 2016 年 11 月 27 日、名城大学、沖縄県

日高艶子、小浜さつき 半側空間無視の代償行為の獲得を促す主意的役割を用いた看護介入の検討 第 5 回日本ニューロサイエンス看護学会学術集会 2018 年 1 月 28 日、日本赤十字広島看護大学、広島県

Tsuyako Hidaka, Satsuki Obama, Nobu Ide. Acquisition of compensatory behavior in patients with USN: Voluntaristic role in the RAM's role function mode. 2018 International conference and workshops: Home heritage- Roy Adaptation model spirituality and service、2018 年 6 月 8 日、Los Angeles, United States.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

日高 艶子 (HIDAKA TSUYAKO)
聖マリア学院大学・看護学部・教授
研究者番号：50199006

(2) 研究分担者

小浜 さつき (OBAMA SATSUKI)
聖マリア学院大学・看護学部・講師
研究者番号：20580731

西口 弘美 (NISHIGUCHI HIROMI)
東海大学・情報通信学部・准教授
研究者番号：40212120

(3)連携研究者 ()
研究者番号：

(4)研究協力者
金山 萬紀子 (KANAYAMA MAKIKO)
誠愛リハビリテーション病院・看護部副院長

吉村 綾子 (YOSHIMURA AYAKO)
誠愛リハビリテーション病院・看護部次長

橋本 美紀 (HASHIMOTO MIKI)
聖マリアヘルスケアセンター・看護部・看護
師長

佐藤 友紀 (SATOU YUKI)
聖マリアヘルスケアセンター・看護部・看護
主任